



上/1274年に創建され、謡曲「鶺鴒」発祥の地としても知られる石和の遠妙寺。
下/写真は今年もお手伝いしてくれる笛吹高校2年生の生徒さん。



平時忠の亡霊救済のために、6万9千以上からなる法華經の文字を川原の小石、一石に一字ずつ書き写したもの。



境内には鶺鴒の供養塔もあり、毎年長澤さんが祈祷をささげている。



巻頭特集

他に誇れる歴史と文化を秘して

笛吹川石和

いよいよ今年も始まった「笛吹川石和鶺鴒」。連夜の花火とともに、笛吹川の夏を彩るこの伝統漁には、深い歴史と誇るべき文化が秘められています。敷居が高いと敬遠しがちな人にこそ知ってほしい笛吹川ならではの鶺鴒。今月は「きつと観たくなる」笛吹川の鶺鴒にまつわる物語をお届けします。



いにしへの薫りと涼を愉しむ新たな観光「笛吹川石和鶺鴒」

鶺鴒

うかい

さんが、高校生の頃のアルバイトをきっかけに鶺鴒に興味を持った様に、現在も鶺鴒補助を高校生が務めたり、若い世代の活躍がみられるのも笛吹川石和鶺鴒ならではのことです。

観覧無料、数メートル先に鶺鴒を愉しむことができるという笛吹川石和鶺鴒。さらに、実際に鶺鴒と同じ格好をして鶺鴒を操ることができる「鶺鴒体験」は全国唯一の試みであり、人気を博しています。

一方、「地元の人には花火も楽しみみしている人が多いんですよ」と坂爪さん。花火と一緒に地元を盛り上げていきたいと考えています。桃ぶどう日本一、温泉街としても名の知れた笛吹市。そこには地元の人こそ知って誇るべき「鶺鴒」の深い歴史と文化が存在しています。

能楽界で「鶺鴒」といえば石和町謡い継がれる笛吹川石和鶺鴒の伝説

笛吹川石和鶺鴒の始まりは、正確には不明。しかし800年を越える長い歴史が存在していることが予測されています。

その歴史・文化の核であるのは、石和温泉郷の中央に位置する鶺鴒山遠妙寺（おんみょうじ）。1274年創建のこの

お寺は、甲斐の国を巡化していた日蓮上人（にちれんしょうにん）が鶺鴒の亡霊をいさめたことに由来すると、住職・長澤宏昌さんは語ります。

日蓮上人が供養したと言われる鶺鴒の亡霊は先の時代の公家（くげ）・平時忠（たいらのときただ）。源平合戦（げんぺい）がせんに敗れ能登に流罪になった後に甲斐に脱出し、公家時代に覚えた鶺鴒を生業として姿を隠して暮らしていたといわれています。しかし、時忠が鶺鴒を行っていたのは殺生禁断と定められていた地。鶺鴒が知れると村人は怒り、時忠を生きながらに「ず巻き」にして川底に沈めてしまいました。成仏できなかつた時忠は日蓮上人と出遭い（川施餓鬼）（かわせがき）という大変な供養の後に魂を鎮められます。その折に、上人がつくった鶺鴒が今の鶺鴒山遠妙寺の由来、そしてこの説話こそ謡曲「鶺鴒」のもとになった伝説（でんせつ）のことです。

「一般的に鶺鴒といえは99人が岐阜の長良川（ながらがわ）を思い浮かべると思いますが、ところが、能や歌舞伎、浄瑠璃



笛吹川石和鶺鴒保存会の会長・坂爪仁さん。笛吹川鶺鴒の伝承に尽力されています。

大人も子供も知っている地域に根差した観光産業へ

「鶺鴒と聞くと皆さん敷居が高いと思いますよね。でも僕は敷居を低く低くですよ。花火の上がる少し前に来てもらい、少しでも見て興味を持ってもらえればと思います」。笛吹川石和鶺鴒の中心、保存会の坂爪さんは笛吹川石和鶺鴒のこれからについてこう話してくれました。誰でも鶺鴒になれることや、市内の高校生有志がお手伝いしてくれることもあり鶺鴒の伝承や後継者には他ほどは困っていない。しかし皆が仕事と両立している分練習時間が少ない為、集中して練習するそうです。

「つぎには、つぎつものがあるのだ」と、胸を張る歴史と文化を汲んだ鶺鴒は、今夏も笛吹川に再現されます。まだ見たことがないという人はぜひ足を運んでみてください。笛吹川石和鶺鴒ならではの愉しさに気付き、魅了されるはずですよ。